



## # 元気少女・四葉の大失敗 ブルマ、脱げなくて

(早く帰りの会、終わらないかなー)

そんなことを考えて、ぼんやりと先生の話聞いていたのは、  
あおいよつば葵四葉だった。

四葉は、跳んだり跳ねたりするのが大好きな、活発な少女だ。

やや吊り気味などんぐり眼。

亜麻色の髪の毛を、元気印のツインテールにし、帰りのショートホームルームの時間だというのに、体操服に紺色のブルマを穿いている。

ついさっきまで体育の授業だったので、このショートホームルームが終わったらブルマ姿のまま放課後に遊ぼうと考えていたのだ。

(なにをして遊ぼうかな？ ドッチボール、おにごっこ……、それともかくれんぼ？)

仲のいい友達となにをして遊ぼうか？

そのことばかりを考えていて、ついつい先生の言葉を聞き逃してしまっている。

算数の教科書の何ページが宿題らしいけど、そんなものは帰ってからパッと片付けてしまうから心配ない。

(早く放課後にならないかな……)

そんなことを考えながら、椅子に座って足をブラブラさせていたときだった。

ギュル、ギュルルルル〜〜。

「はうう……!？」

四葉はお腹をさすって、顔を歪めてしまった。

なんだか急にお腹の調子が悪くなってきてしまったようだ。

(そういえば、今日は給食がシチューだったからいっぱい食べ過ぎちゃったよ……。それに牛乳もたくさん飲んじゃったし)

今日のメニューは、四葉の大好物のクリームシチューだった。

それに早く大きくなりたいから、欠席した生徒の牛乳をいつももらって飲むことにしている。

……その涙ぐましい努力は、いまのところ身長には出ていないのだけど。

ギュルル、ゴポ、ゴポポ……ッ。

「は、はうう……っ。こ、これは……ちょっと、お腹、壊しちゃった……!？」

認めたくはなかったけど、どうやら小さな身体は暴飲暴食に敏感のようだ。

ブルマに覆われている下腹部からは、ゴポゴポと流動体が蠢く感触がする。

胃で消化されてドロドロになったチョコレートシェイクが、こうしているあいだにも大腸のなかで膨張していく。

「う、うそ……っ。なんで、こんなに急に……っ」

身体が小さいぶんだけ、お腹の具合はジェットコースターのように一気に降下していく。

額には脂汗が浮かび、顔面は蒼白になっていた。

(帰りの会が終わるのは……、あ、あと三分くらい……!?)

時計を見て、再び視線を机の上に落とす。

こうやって木目を数えていないと、お腹の痛みに気を取られて負けてしまいそうだった。

(あともうちょっと……。あともうちょっとで終わる……)

たった三分だというのに、四葉の小さな身体は悲鳴を上げていた。

ギョルゴポポ……!

ぐるるるるる～～～!

「あっ、あっ、あああああああ……」

腸が捻れるかのような痛みだった。

もう、ダメかも……。

このままウンチを漏らしちゃったほうが、楽になれるかも……。

頭の中が真っ白になって――、

**ジョボボッ！**

ちょっとだけおしっこを漏らしてしまった。

チビッた……、にしては、ちょっと多すぎる量。

おまたが生暖かくなって、お尻のほうにまで広がっていく。

(うう、おしっこ……ちょっとだけ漏らしちゃった……？ ブルマの外には染み出してないみたいだけど……)

紺色のブルマはちょっとくらい汗をかいても、お尻に染みができないようになっているから大丈夫なはずだ。

(セ、セーフ……。だけど、ううっ、ちょっとムズムズするかも)

いくら染みができないとは言え、ショーツにはおしっこが染みこんでしまっているのだ。

湿ったショーツが、おまたに張りついてきて気持ち悪い。

なんだか気まずくなってしまうと、四葉はもじもじと内股を擦り合わせてしまう。

だけど不幸中の幸いだろうか？

(あれ……なんだか楽になったかも……？)

膀胱がちょっとだけしぼんだせいか、ほんの少しだけ楽になることができた。

だけどまだ油断してはダメだ。

腹痛には波がある。

たとえ波を一つ越えたとしても、次に待っている波は、もっと高く激しいものになる。

(お、お願いだから、早くチャイム鳴って……っ)

そんな四葉の思いが通じたのだろうか？

帰りのショートホームルームの終わりを告げるチャイムが、やっとのことで鳴り響いてくれた。

「それじゃあ、今日はこれまで。宿題、しっかりやってこいよー」  
やる気がなさそうに言う担任に、生徒たちが立ちあがると、  
「先生さようなら、みなさんさようなら」

いつもの挨拶をして、いつもの放課後になった。

クラスの男子たちはカバンを持って教室を走り出ていき、女子たちは教室に残っておしゃべりを始めている。

そんななか、四葉は……、

「や、やっと終わってくれた……」

脂汗を浮かべた四葉は、よろめきながらも立ちあがる。

ショートホームルームは終わってくれたけど、本当の戦いはこれからなのだ。

☆

ギョルギョルに下してしまったお腹を抱えながら、四葉は教室を出て、トイレへと歩いて行く。

ショーツは汗に湿っていて、ペッタリとお尻に張り付いてきていた。

まるでおもらしをしたみたいにグッショリと濡れている。

まァ、その何割かは本当にチビってしまったのだけど……。

(あ、あともうちょっとでトイレだよ……。早く、早く楽になりたい……！)

その一心で廊下をよろよろと歩き、なんとか女子トイレの扉を開ける。

ピンク色をしたタイルに、ちょっとだけ安心できた。

(ここまでくれば……もう、あともうちょっと……っ)

微かにツンとしたおしっこの香りが漂っている女子トイレには、幸いなことに誰もいなかった。

もしもこれで行列ができていたら、四葉はここでウンチを漏らしてしまっていたことだろう。

個室へのドアは全部空いていて、どのトイレも選び放題だ。  
——だが。

ゴロゴロロ！

ギョポポポッ！

そのときだった。

今までの痛みとは比べものにならないほどのビッグウェーブに、腸が波打ったのは。

「は、はうう!？」

それは、これまでで一番大きな波だった。

あまりの痛みにも、四葉はブルマを穿いたままだと言うのにへっぴり腰になってしまう。

学校でうんちをするなんて恥ずかしいから、一番奥の個室に入ろうかと思っていた。

だけど、もうそんな余裕なんて残されていない。

(い、一番近くのトイレえ……)

へっぴり腰になりながらも、一番近くの個室へとなんとか辿り着く。

個室に入り、ドアを閉めれば、もうそこは外からは隔絶された世界だ。

(や、やっとうんち、できる……っ。もうすぐ、楽になれるっ……！ もう、ゴールしても良いよね……！)

目の前にちょこんとある、  
和式の便器。

(ブルマとおぱんつ降ろして……ううっ、お腹、痛いいい……！  
もう、もう、もう、漏れる！)

だけどここまでくればもう安全だ。

あとはもう、身体に溜まっている毒素を一気に吐き出すことができる……。

「ホッ」

四葉は、安心してため息をつく。

だけど、それがまずかった。

**ニュルルルルルル！**

安心して、お尻の力まで抜けてしまったのだろう。

ふっくらとしたお尻のあいだを、熱く柔らかいものが一気に駆け抜けていく感触。

「あっ！ あああ！ だ、だめえ！」

四葉はびっくりして、お尻を後ろに突きだしてしまった。そんなことをすれば、どうなるのか考える余裕さえもなく。

もりもりもり！  
にゅるるるるる！ ブリ！

へっぴり腰になってブルマに覆われている小さなお尻……。その真ん中の割れ目が、モッコリと盛り上がった。

「あっ！ あああ……。か、かはっ」

プシュ！

こうなってしまうと、女性器では我慢することができずに、おしっこまで漏らしてしまう。

女の子の尿道は、太く、短い。

それはうんちをおもらししてしまって、肛門が開いたら勝手におもらししてしまうほどに。

ここまで読んでくださりありがとうございます。

体験版はここまでです☆

本編はうんもご無しです☆

